
黄昏に煌めく

柚 雨深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏に煌めく

【Nコード】

N3540J

【作者名】

柚 雨深

【あらすじ】

昔の恋が忘れられず、人生の終末に再会を望んだ太郎。自分の命も長くないと自覚しているが希望も持ちたい。長年の望みであった恋人桃との再会が実現され、将来に望みも持てると考え始めた。

黒い窓ガラスに打たれた夜の雨が僅かな光に反射し、遠い夜空の星の如く小さく輝いて見える。街灯の薄明かりが欄間を抜け、天井の一部をぼんやり照らしている。暗い部屋のストーブには赤い炎が灯り、風呂上がりでも暖かさが浸みるように感じた。

蛍光灯と付書院の奥に明かりを灯すと、床の間の、見事な朱の紅葉と坂鳥が描かれた掛け軸が映え、視覚でも晩秋を実感する。

まだ畳の匂いが強い四角四面の日本間は、来る時遠くから眺めた木造の外観から察すると、新築ではないのだろう。

表口も新しく感じたが、以前気に留めた玄関横のコテ絵はそのままで、見覚えのある景色が、昔に戻れた安心感で少し嬉しく感じる。

しかし宿に入ると至る所長年の手の込んだ改装と新たな趣を入れた増築が為され、古くからの温泉宿とは別の世界も生まれていた。

人間の内面で客を持てなす心が入られた数寄屋風の和室も、多分主人の美学なのだろう。格式と豪華さを排した作りが逆に荘厳で、

本当に二人が以前訪れた宿かと再度周りを見廻してしまう。

どうしてこの様な立派な部屋に通されたのであろうと驚いた。事前に希望は何も伝えず、昔一度訪れたと話ただけなのだ。古い記憶を辿ると部屋の様子は全く違うが、前に宿泊した客間と同じ場所かも知れないと思うと、宿の気遣いかも知れない。だが、これだけ変化すれば、私にはその心遣いは意味が無かった。それとも、老いた二人連れには似合いと、帳場が割り振ったのだろうか。

光と影、静と動、時間の経過を感じる空間。隣の寝室には既に二組の布団も敷かれ、今夜1人でない心地良さを強調していた。

遙か昔訪れたこの温泉宿に私が決めたのは、二人が最後に旅した所で、自分の気持ちが残った儘の場所だからだ。この同じ地で、もう一度自分と向き合い、桃との未来を望んだ。

しかし時間が経過したとは云え、此処は全てが変わっていた。秋から冬へと亘る十月の宿は、過去の鄙びた雰囲気は少なく、近代的となっている。変化が無いのは多分、源泉の湯と、街から遠く離れた場所に立つ朽ちた道標ぐらいだろう。

庭に沿った長い廊下も張り替えられ、当時の儘と思つた屋根瓦さえ瓦当に殿様の印が焼かれ、近年地元で作られた物と思われた。雨風に晒され、自分と同様に疲労している筈だが、鈍い輝きからは歲月の長い経過は感じられなかった。

離れに露天風呂が設置されていたが、敢えて懐かしい大浴場に桃を誘った。濃い湯気で定かでないが、千人風呂は昔と変わっていない様だ。しかし以前は屋根だけで雨を凌いでいたが、今は四方を板で囲われ露天の雰囲気は無くなっている。雨除けだけであれば晩秋の寒さも感じたであろうが、昔より檜の臭いも強く感じ、寒風を感じる窓さえ無い。

風呂への入口が離れた両端に二カ所ある混浴は同じだった。当時は狭い脱衣場の片隅に戸板一枚の入口であつたが、そこは暖房の効いた広い寛げる場となり、戸も硝子で立派になっている。

壁の一部に詰められた梅模様の透かし彫りと古い柱時計だけは何処からか移り、この宿の歴史を繋いでいるのだろう。

中は湯煙と薄明かりで手の届く近さに人が寄るまで、若いか老人か、男か女の判別も出来ない。窓があれば、月明かりが少しは助けになったであろうが、四方が蒸気の染み込んだ板であれば、視界は湯気を照らす弱い裸電球だけしか助けにならない。

屋根もあり、壁で囲まれても露天かと過ぎつたが、来る途中の案内は、今露天が外され、千人風呂としか表示されていなかった。

そんな湯煙だけで暖かい程視界の悪い風呂の中で桃を探したが、女の入口付近に近寄る事はこの歳でも躊躇いがある。混浴の礼儀は持ち合わせており、そこで敢えて女性の集まる場所に捜しに行く事に、

自分と桃の気持ちを天秤にかけて悩んだ。

それでも温泉の中に首まで浸かり、膝を曲げた老人には辛い姿勢で探したが、結局桃を見つける事は出来なかった。暖簾を潜る前に、昔一緒に入った中央立て板近くで待つと、彼女に話すべきであった。声を出す事も考えたが、混浴で年甲斐もなく気後れもある。

やはり若者に戻り、大声でも出さない限りこの広さでは無理だ。

昔の様に二人近くで温泉に浸かりたい思いが消えないが、寝る前に再度来ようと一人暖まる事に諦めた。

思い出せば大きな声を張り上げ、男湯から天井に向かい「桃上がるぞ」と合図の大声を掛けたが、今は何と声を出せば良いかも浮かばなかった。この歳で桃と可愛い名も、他人に恥ずかしさがあった。増して夫婦でもないのに、婆さんとは呼べる筈もない。気持ちはあったが、桃が何と返事をするのかも浮かばず、止めた。

あの頃も返事は一度も聞こえなかった。それでも声を出す自分に喜びを感じ、恥ずかしさも小さく、愛情の勇気で呼べたのだ。

今声を掛けても、求める声は同様に聞こえないだろう。笑顔と一度もない彼女の返事が聞こえる気もしたが、やはり声は出なかった。

風呂から上がると「ゆ暖簾」を眺めながら、桃は長椅子に座り待っていた。私より早く上がるのは何時もの事で、決まって牛乳を飲んでいる。「湯上がりの冷たい牛乳はビールといい勝負だね」、と言うのが彼女の決まり文句。私が「やっぱ、ビールでしょ」と戯けると、吹き出しそうになる笑いを必死に堪えていた。

風呂上がりには必ず出口でビールを買った。風呂代より高く付いたが、私の欠かせない小さな贅沢だった。

彼女と一緒にの時、風呂上がりの旨い最初の一口目は、そんな私でも必ず桃の牛乳で「これから飲むでしょ。牛乳飲んでおくと酔わないわよ」と云う言葉を受けて仕方なく「男は黙って」と腰に手を当て牛乳を飲み始めると、彼女は堪えきれずそこで声を出して笑う。そして今日も、飲みかけの牛乳パックを差し出した。私が暖簾を潜

るのを少し飲んで待機していたのだ。憎いが私がそうされると喜ぶ事をまだ覚えていた。前と同じ、桃の忘れていない愛情表現。違ったのは牛乳が瓶から紙パックとストローになった事だけで、時代の流れを感じ、寂しさが感じられた。

当時私の声に、いつも急いで服を着たのだろう。

しかし今夜は声も掛けないが、昔の様に先に牛乳を飲んでいた。以前は名を呼んだ恥ずかしさで早いと思っていたが、そうではないのかも知れない。現に今日は合図も送ってはいない。桃が鴉の行水と思う私の考えも違うだろう。名前を叫んでも知った人間も居ない風呂場なのだ。呼ばれて返事をし、手でも上げない限り自分だと知れる事はない。声に返事が出来るのは彼女1人で、私の牛乳同様、きつと喜びいっぱい、名を叫ぶ私への思いで急いだに違いない。しかし今夜は違う嬉しさでも、同様に早かったと思いたい。

桃の濡れた髪が首に解れ、火照りを増した身体が眼鏡を曇らせていたが、彼女の目には私の心の中まで見えていたに違いない。

冷たくなったタオルで頂を拭いながら待っていた桃に、湯上がりで化粧もないが逆に女を強く感じるのは、自分が男の所為と温泉の効用だろうか。手の仕草で女の色気を私に訴えて居たように感じたのも、普段と違う湯上がりの嬌態がそう見せたに違いない。

働いていた頃、普段から化粧をしなかったのは保母の仕事の為と思っただが、それでも彼女は十分綺麗だった。意識して「すっぴん」を通したのであるが、女であれば気にすべき事とも考えていた。

そんな桃に「肌が綺麗だから化粧は不要だな」と、綺麗と云う言葉を使うと、喜んで手を繋ぎ余計可愛く思えた。

昔の彼女を思い浮かべると、湯で上気した顔は目尻の皺まで隠すことなく晒し、多くの時間が過ぎた事を実感する。二人で過ごした時間が今に戻り、桃が隣に居る事が自然な気持ちだった。

私も頭が白く、彼女には孫も居る事を実感すると、これから先どれ程時間を使えるかと思いが馳せるが、可能ならば世の幸せを感じ、

二人静かに過ごしてみたい。

それが私の夢、二人で過ごす安堵の時間を今日まで求めて来た。

「暖房止めてね」

寢床から起きて窓際のストーブのスイッチを切った。戻りは暖かい隣の布団に身体を入れる。桃は端に寄り私の寢場所を空けた。

若い頃代謝が良かったのか、桃は寝る前には何時も部屋の温度を気にしていた。私も久し振りに今夜は身体に熱を貯めている。温泉で身体の痛みも弱くなり火照りさえも感じるが、今夜の老婆はそれ以外の熱も感じているに違いない。

「暖かいと眠れないの」

冬は暖房、夏は冷房を切る決まりだ。確かに部屋の温度を下げ、布団の中で桃の温もりが伝わると私も深く眠りに就いた。自分で「体温が高いの」と言っていたが、冷たく透き通った空気は、私に彼女の体温を更に熱く感じさせた。老いた今でも、そう思っているのか。

若い時より低いと思えるが、慣れ親しんだ習慣は孫も居る老人となっても、変えられず持っていた。

「何も変わって無いわ。お互い老けただけよ」

「そうだな」

言葉は返すが変化のない事はある得ない。時間の経過が全てを変え、年老いただけではない。何が変わりないと云うのだ。

別れた時から互いに知らない生活を過ごして来た。変化が無いとは何気ない言葉だろうが、二人の感情も含めあり得ないだろう。

共有していない時間が二人を別人に変え、互いに遠い存在にしている。二人のこれまでの人生を消し去り、初めに戻りたい気持ちが私にはあるが、それは無理な考えなのかも知れない。

「でも本当に、なると思っていなかったわ」

「どうして」

「だって……………」

「俺はあの時も云ったけど、ずっと諦めてはいなかったよ」

愚かな過去、最後は自分の知らない男と結婚すると云った桃に一人になるまで待つと、途方もない言葉も吐いた。愛した女性を自分が原因で他人に奪われた事が悔しく、醜く苦しめたい気持ちもあった。彼女を失いたくない私は妻が居るにも関わらず、どうしても一緒にになりたいと、桃を苦しめた無責任な言葉を止められなかった。しかしそんな馬鹿な私の話には三十代で分別と世間の冷たさも経験した彼女は踏み込む事もせず、最後は現実を見極め、彼女は私より、他人の私の家族を考えたのだ。人間として、私の邪な束縛を離れ、正しい道に戻った決断が正しく、その結果として今日の再会が実現したのだろ。桃の良識が、後の私の幸せな生活も導いたのだ。今考えると本当に愚かな自分だったが、気持ちを正しながら今まで真ともに生きられたのは、この時の愛情が大きいに違いない。決して互いに嫌いで別れたのではないと今も信じている。

結ばれない可能性は、二人が何時も感じていた不安だった。

あれから随分、長い時間が過ぎてしまった。

「でも、こんなおばあちゃんになったし」

「俺は今幸せだよ」

「本当に？」

「本当だ」

「でも……」

「でも、何」

「あと何年こうしてられるかしら」

私は少しでも長く傍に居たい願いを込め、優しく桃の肩を抱いた。

私が知っている頃より身体が小さく思えたのは年老いた所為か。

「何年かしらね」と云う桃に、何と答えれば良いか考えたが、返事が見つからず曖昧に濁すしか無かった。この答えは自分か彼女の寿命であり、自らの残り時間を決める勇氣は無かった。健康に自信のない私は大きな希望を押さえ、二人にも大きな望みを持たない時間が自然と考えた。この歳になれば普通に薬も飲み、健康の不安は誰

にもある。何時身体が壊れ、動かなくなっても不思議ではない。その時「この人に迷惑は掛けてはいけない」、今はそう思っただけだ。

「三年ぐらいかな」

「そうかもね」

「今夜が最後の夜かも」

「でも、平均寿命も延びているらしいから」

「あれは、今年生まれた子供の予測だから、俺達はずっと短いはず」

「確か、太郎は六十歳まで生きられないとか云ってなかった？」

「云ったな、なんかそんな事。何かの数字で寿命を計算して」

「予想は当たらなかったわね」

桃の肩から優しく腕を抜き、寝床から離れタバコを探した。布団を敷く為部屋の隅に移動した座卓で、飲みかけの冷めた燗酒を口に含み、煙草に火を着けた。暖房を止めた所為で少し肌寒く感じる筈だが、桃の温もりが身体に残り、冷や酒も苦にはならなかった。

寝る前は再度千人風呂に行こうと思っている。それとも、この離れの露天風呂に二人で入ろうか。昔なら抵抗なく入れたであろうが、何故か恥ずかしさも湧いてくる。湯船は二人でも十分に広く、雨を見ながら露天風呂で暖まるのも風流で贅沢な気分になれるだろう。信楽焼きの美しい陶器の浴槽だが、誘えば何と思うだろうか。若い桃なら部屋に通されて、直ぐにでも楽しんだ筈だ。私の知る桃は短くさつとしか時間を掛けないが、温泉は好きで回数も多かった。こなら時間を気にする事もなく、ゆっくりと楽しめる。それとも、やはり直ぐに上がるのだろうか。

無垢の座卓の上に湯飲みを出して酒を注ぐと、桃は浴衣の上に袈纏で、私の隣に静座した。

「なんで」

「そうだな、桃は百まで生きるかも知れないと思っただけ、俺が六十じゃ、絶対桃と一緒に出来ないと思ったからな」

「そんなに私の事、好きだったの？」

「桃も云っていたぞ、太郎の趣味は桃だって」

「覚えていないな。そんな事云ったかな」

「確かに云って、いましたよ」

知らないと思えるが、桃は良く覚えている筈だ。嬉しそうな顔で前と同じように、自分は愛されていると云いたげに自信を見せる。私に向かい「惚れたらほうが負け」と何時も笑っていた様に。

布団が心地よい温度だが、帰る気は無い。今の喜びが消える事が寂しく、どんな話でも良いから彼女と話したい。桃との会話は決して二人が歳老いた所為だけではなく、傍にいただけで心が落ち着き満足感も感じている。この時間は本当に大切にしたい瞬間だ。やはり露天風呂に誘ってみようか。せつかくの贅沢な風呂だ。二度と入る機会はないかも知れない。赤く照らすガス灯の炎が、老いた身体に甦る力を与える可能性も感じる。恥じらいと安らいだ気分を味わうのも、二人の力となるだろうと思った。

私は何年この時を待っていたのだろう。愛し合いながらの別れ、そして先の期待出来ない身勝手な一方的な再会を願っていた。

互いに苦しみ、人の優しさを求めた時に巡り会った。桃は恋愛で悲しい思いをし、私は自分が求めるものを見失い、そして出会った。

それは偶然、しかし互いに探していた運命と信じ、長い間二人の現状も考えず互いに求め、辛い別れまで深く恋に落ちた。

しかし今、彼女は再び私の下に帰った。障害は消えたが、自然の摂理で近く死が二人を確実に離す。それもそう遠くではない。

二人の残り時間も、今の再会も、そして別れも既に愛を語り始めた時から決まっていたのかも知れない。

私は既にロスタイムに入っているが、止まる寸前の時計を自ら動かし、最後に桃と暮らす望みを彼女に告げた。「我を通せば良かった」そう思い、悔いを残さない為に行動し、会えた事に充足感も感じている。後悔する時間も無い自分だから躊躇う事なく、そして今夜隣には桃がいる。自分の人生終末近くで最も傍に居て欲しいと望んだ人が、今手を繋ぐ場所にいる。

彼女も同じ気持ちでなければ、今此処に来たとは思いたくない。

今夜命が絶たれても、自分に後悔はない。このまま明日、目が覚めない事が寧ろ幸せとも思える。そんな、安らぎと達成感さえ感じる穏やかな気持ちで、指輪の無い桃の冷たい手を握った。

「娘に何か、云われたか」

「お好きにどうぞ、でもちよつと恥ずかしいとも千春が云ったわ」

「だろうね、うちも同じだ。その歳で『老いらくの恋』か、なんて墓地に近き老いらくの恋は怖るる何もなし」

「よく知っているな、そんな歌」

「老いらくだからね」

経帷子の近い老人が、恋人気分で胸に温もりを感じた。私は、気持ちの分かり合えた関係に戻れたような気持ちになった。

「二人の子供でもいればな」

「そんなこと・・・」

「できたら欲しいな」

「無理よ、もう女でないわ」

「桃はまだまだ十分女だよ。こうして腕の中にと女を感じる」

「ありがと、太郎」

あり得ない私の話に合わす桃。二人の子供が欲しいと話をした事も、遠い昔の甘くて辛い思い出。

「本当に欲しかったな」

「そうですか。でも・・・」

「でも、何」

「昔の私を知っている太郎で良かったわ」

「どうして」

「どうしてって・・・」

老いて望みが叶わないのは仕方のない定めだが、別れる前に強く二人の子を望んだ思いが、今再び湧いてくる。

しかし私が今桃に求めたのは肉体の可能性では無く、自分の気持ちの帰る場所。それは遠い過去の涙を、再び呼ぶかも知れない。

確かに、青年の頃はその美しい身体も求めた。二人の気持ちを確かめ合う役目は遙か昔に十分に果たし終えた。今もその機能は果たすだろうが、その先に希望は見える筈もない。

別れて他人の奥さんとなった桃。今日まで待ち続けていられたのは、彼女から受けた労りと優しさ、そして私の小さな希望だった。

結婚しても時折連絡をくれた彼女の気持ちの理解出来ず、自分の気持ちを抑えるのに苦労したが、励まされもした。

今となっては過ぎ去った話だが、桃と過ごした十年がその後の私を支えたのは確実だ。私達の生きた歳月からみれば短い期間だが、されど忘れられぬ時間。二人にとっては別々の相手と結婚生活を送った離れた時も、消すことの出来ない時間として心に残している。彼女は今も自分が愛した昔のままの素敵な女性だった。桃を悩ませ苦しめた私が、彼女と一緒に過ごした時間で生きる強さを貰った。今、私から桃にしてあげられる事は何かあるだろうか。彼女の傍で静かな時を過ごす私の希望を、彼女はどう思っているのだろうか。

「孫は今年から小学校かな」

「来年」

「そうか、もうそんなになったのか。でも信じられないな。自分はまだまだ若い気でいたが」

「そうね、私も信じられないわ。この歳になって、太郎に抱かれるなんて。なんか恥ずかしい」

「歳は関係ないけど、別な意味で恥ずかしいかな。体がしなびた事とか」

「酷いこと言うわね」

「ごめん、ごめん。俺はよれよれだよ」

「仕方ないわ、老いらくだから」

「確かに」

「でも、こんなおばあちゃんでもいいの」

「こんな、じじいでもいいのか」

「バカ」

「バカでもいいの」

まだ忘れていない桃との抱擁。この人が人生最後にキスをする人。気持ちはずっと遡り、トキメキすら感じる。肉体の衰えに悲しさが増し、後悔が少し小さくなる様に思えた。

秋の冷たい風と雨は、今も変わらず続いている。ガラスを伝って落ちる滴の早さに寂しさを感じ、止まるが如く流れる事を、自分と桃の余生と重ねて願った。

「桃を愛してあげたい」

「私もそうして欲しいわ」

「本当にそう思うか」

「思うわよ」

「桃はやっぱり灰になるまで女だな」

「そうよ。それに私は太郎と出会ってからエッチになったのよ」

「おいおい、そうだったか」

「感じなかったの？」

「確かにそうかもな」

「太郎は私より、もっとエッチでした」

「こんなじいさんからかうなよ」

「いいえ、そうでした」

今、桃は何を考えているのだろうか。確かに棺桶に片足を入れている老爺と老婆が話すと、楽しい話題かも知れない。

「ねえ」

「何」

「これから、どうする？」

この言葉も昔良く聴いた台詞だった。行動を起こす時は必ず私にこう云って自分の希望も云わず、私の意見に反対もしなかった。

その彼女が答えを迷い、そして反対し、最後に自分の思いを強く伝えたのは、私の求婚に対するただ一つの答えだけだった。

そう思うと、桃と付き合った長い時間が最後の時以外は現実離れしていたのかも知れない。十八の年齢差、不倫、それに駆け落ちの相

談までしていた。やはり結果の無い幻を求めていたのだ。

しかし、今でもどうして最後まで押し切れなかったのかと考える時もある。将来を考え過ぎて自分が諦めたのだろうと思うも、現実を振り返れば当然だった。障害が多すぎ、それがより一層気持ちを強くした時期もあったが、どこかで気持ちが弱くなり諦めたのが遠い過去の話。今でも消す事の出来ない悲しみとして残っている。幻の儘、幸せに賭けたい気持ちは、今もまだ消えてはいない。

二人で布団に戻った。当時のように布団の中で足を絡めて体を引き寄せると、温もりが自分の夢を再現するように湧き出てくる。その全ての場面で浮かんて来るのは、優しい彼女の笑顔しかない。

「今でも、体温高いな」

「太郎の知っている頃はもっと高くて、何も着ないで寝ていたわ」

「お尻半分布団から出して、俺に体重乗せながら寝ていたよな」

「こんなふうだね」

桃は私の体に右足を乗せ、抱き枕のように強く抱きついてきた。

私と別れた後も他の男とこうしていたと思うと、愀気の気持ちが湧いて、老人の感情でないと自覚した。彼女に対する嫉妬まで呼び戻されたのか。

老いた隣の桃は三十代より随分と身体が小さくなり、当時減量を試み、今瘦せた彼女は私の知っている桃とは体温も腕の感覚も、別人の样にも思える。

「この暖かさ、昔と同じ」

目を閉じて髪の毛の香りを感じ、桃を喜ばせようと声を掛けた。

「そうですか」

「同じだよ。そして、今も大好きだよ」

僅かな明かりが桃の顔を照らす。皮膚の衰えが弱い光を吸収する。

光を跳ね返す力も無くなった身体が愛おしく、悲しみは湧いてこない。

「全てを包み込んであげたい」そう思い、彼女に対する愛情を、再度自分に問い掛けてみた。

「暖房切ったから、寒くないか」

「寒くなったら、暖めて」

「懐かしいな、いくらでも暖めてやるさ」

屋根の雨音が静寂を破り、遙か昔の同じ情景を心に浮かばせる。

今になってどうして桃とこの時間を過ごして来なかったのかと後悔するも、全てが自分の行動の結果として受けとめざるを得ない。苦勞を重ね少し小さくなった肩を抱くと、自分の過去も思い出される。これから何が出来ののだろうかと考えたと、何も特別な事は出来る筈も無く、優しく自分の温もりを桃に移した。

「もし、二人の子供がいたら、どんな子だったろうな」

「きつと女の子。でもそんな話、止めましょうよ」

「ごめん、嫌な事思い出させたな」

「いいわよ。もう終わった事よ」

「あれから、ずっと後に知った事だけど……」

「なに？」

「あんな……」

「云いなさいよ、もう気にしてないわ。と言うより、太郎との事は終わっているわ」

「ごめんな、悲しい思いさせて」

「太郎だけの責任でないわ、私の責任もあった。太郎がずっとお参りしていたの、なんとなく知っていたの。去年、光の忌い上げだったから私、今年は行かなかったわ。太郎は行った？」

「あの食堂覚えてるか。最初に行った時、二人でそばとライスカレーを食べた小さな店。毎年食べていたよ、今年も」

「そう、でも来年は止めましょうね。どこかで区切りをつけないとだめよ。本当は全て忘れてもいいと思っているの。私ね、結局光の事誰にも話しをしなかった。だから知っているのは太郎だけ。お墓の中までこうして持つて行くの。だから太郎も忘れて」

私の中で桃と会わなくなつてからの時間はそこで止めている。

二人の苦惱も鮮明に甦り、それがまた辛い後悔となった。

山の上の大きな観音様の下で、桃と私の光は眠っている。光の痕跡は何も無く、ただ多くの水子像の中にひっそりと混ざり、離れた二人の心の中でも未だに生きている。

本来なら弔い上げで土に帰るのだろうが、陶器の仏像となった光は、互いの記憶からは永遠に消える事は無い。

光のお陰で、今日まで彼女との縁は切れる事が無かった。

「隣に桃がいれば、もう行かなくてもいいよ。桃との繋がりが欲しくてずっと思っていた。あの場所しか無いような気がしてな。毎年あそこで会えるかと期待して行っただけ、一度も会わなかったな。会わないように、していたのか」

「特別何もしなかったわ。きっと、太郎と私のタイミングの悪さね。良ければ多分、一緒になっていたわ」

「今、一緒だろ」

「あれから何年かかってこうしているのよ。人生終わろうとしているのよ。絶対タイミング悪すぎよ」

「でもいろいろあって、最後に一番傍にいて欲しい人と一緒にいるのが悪いのかなあ。最高のタイミングだと思うけど」

「本当にそう思っているの」

桃も出会ってから今日までの事を、思い出しているのだろう。自分も思いを呼び戻し、これから生きて行くことを考えている。今までの人生を振り返り、これから二人で最後の短い時間を共有できることは、寧ろ幸せな事だと考えていた。そして光に会いに、来年は二人で行くだろうと、なんとなく感じていた。

過去と現在までの苦勞が汗となり流れ、もう流す涙はない。

互いの気持ちだが、遠足の前夜の子供の様に、眠りを誘う事もない。「窓を開けようか」

夜の雨が、街灯の光を鈍くしている。窓から入る湿った空気が寒さを和らげる。煌めく弱い光が、遠い時代の眩しさの様に思えた。

「ねえ」

「なんだ」

「さつき、何、云おうとしたの……」

彼女は感じたのだろうか。

「勿体ぶるの、昔から太郎の悪い癖よ」

「勿体ぶってなんかいないさ。時間は短いけどこれから二人の時間はあるから、焦らなくてもいいのかなって。今まで桃に話せなかった事、話したい事、ゆっくり話をしようかと思ってさ」

「そう、それで」

「桃をこんな年寄りになつても、やっぱり大好きだつてこと」

「それは、さつき聞いたわ。違うでしょ、太郎の考えている事云いなさいよ。もう私たちには何も隠す必要なんて無い筈よ」

桃は本当にそう思っているのか。隠し事のない人間なんていないと考えている自分が、そんな事を云う彼女の表情で気持ちを探った。自分も誰にも云えない、桃にも云えない事はある。私の云いにくい何かを聞いて、自分が楽になりたいのだろうか。

「人間終わりが近づくと、欲は無くなるけど後悔は出てくるな。出来なかった事は今更考えても仕方無いけど、でも、ああすれば良かった、ここすれば良かったと、こうして桃と居るとつい考えてさ」
桃は私が何を云いたいのか、やはり感じている様だ。彼女と居て自分が考える事は、桃が自分と居て考える事と同じだと思う。

確かに長い間離れては居たが、彼女の事を思つた時には何時も昔に蘇り胸を熱くした。二人の間で止まった時間は互いに最後の時に遡り、自分も彼女も少なくとも今夜気持ちは若返っている。心は別れた時に帰り、自分の姿を忘れた。変化したのは周囲の環境と互いの寿命であり、時間の少なさが求める気持ちを増幅させる。

時が経つたからこそ、分かる事がある。
胸の鼓動だけが 桃との時を刻んでいく。

君を抱き寄せることくらいしか
できないけれど

もしもさみしいなら

僕の傍において

彼女が男性ボーカリストの歌を静かにくちずさむ。若い頃とは違い、二人と同じように長い人生を送った彼の歌は敢えて静かに歌うことで一層強く心に響き、私も好きな歌だった。

この歌で何度も涙した桃が、今またどんな感情で歌うのだろうか。

今、自分も彼女も若い頃以上に互いを求め、必要としている。それは過去の後悔ではなく、短い未来と自分の気持ちに正直に向き合った結果だ。年老いた外見から他人にはそんな感情も見えもしないだろうが、私は桃の目に初恋をするような清らかな感情を見た。人生終末の時に煌めいて、命を賭けて愛する激情が写っている。遠回りもした。時間も残り少ない。

しかし、自分の求めた人が今ここにいて、既に障害も無い。二人別々の人生は互いに人並みの幸せだったのだろう。だが、自分の気持ちを犠牲にしての家族の幸せであったのかも知れない。

今振り返ると、偽りの幸せだったのではなからうかと思いましたが、結果として家族から喜びも貰い、幸福な人生だったと云える。

しかし、何度も後悔はないかと自分に問う感情は消えなかった。

桃と離れ、互いに違う人生を送り、二人が求めた何かを本当に感じられる今になって、自分の気持ちを再確認する。

自分の手は今、求める人が届く場所にある。彼女との時間を今過ごす事で、未来、そして過去も全て幸せな人生と思えるのは、今日まで自分の役割を果たして来た結果と自覚する。

私は確かに、恵まれた人生を過ごしたのだ。

だが、私はこの女性を最後まで求めていた。過去の選択は間違だったのか。例えそうだとしても、今それは後悔とはならない。

別れの時、悩み二人で出した結果であり、それを後悔と云うのであれば、私の人生は本当に悲しい時間と変わってしまう。家族との楽しい時間も、有意義な生活も送った。決して後悔にはならない。

自分の人生で果たさなければならぬ全ての予定が終わった今だからこそ、改めて感じるのかも知れない。

彼女もそう感じ、故に、再婚もせず今夜此処にいるのだろう。

今回の決断は間違いではなく、隣に桃が居る事で証明できた筈だ。

そしてこれからは、誤りと後悔はしない。時が経ったからこそ、分かる事もあった。しかし時間が過ぎ、再会した今だからこそ口に出してはいけない事もある。だが、当時から氣に掛けて今更どうにも成らない疑問が、今回彼女に連絡した最大の目的かも知れない。

桃はその答えを、現在まで一切何も語っていないが、思い当たる事は幾つかあった。自分の思い過ごしかも知れないが、今は事実と願う気持ちが大きくなっている。今更二人に波風を立てるつもりはないが、自分は聞かせて欲しいと思っている。この歳になれば納得し、気持ちを静める事しかない事も理解している。

桃が今まで自から話さない以上、彼女の辛さを誘うような言動は出来ない。無言の奥には、多くの悩みと桃の人生の選択、そして涙が溢れそうに貯まっているに違いないのだ。

しかし、今も桃を求めていると自覚する自分は、どうしても答えが欲しい。「今直ぐに」、離れた全ての時間でそう思ってきた。

しかし、聞いた後どうする事も出来ないのも理解している。

私は自分の体が長く持たない事を知ってしまった。今では普通になった癌の宣告を、冷静に受け止めた。「胆内胆管がん」、リンパ節転移と胆内転移が認められ、切除手術を勧められたが、素人考えで切らないほうが少しでも長生き出来ると自分の意志で手術を回避した。他人事と思っていた癌が自分に降りかかり、妻も同じ病で二年前に亡くした事が気持ちを変えた。私は諦めの気持ちが湧いていたが、高齢が進行を遅くらせる唯一の救いとは皮肉だった。左目の視力も極端に落ちている。薬の副作用かどうかもわからない。

故に、今真実を確認したい気持ちが強くなったのだ。真実を知っても二人に変化はないかも知れないが、自分の気持ちは変化する。

ここまで生きて、この歳で生きる希望が強くなるのもおかしい気分だが、残りの時間を今以上に明るく過ごせるかも知れないと思っている。だから、桃に会いたいと強く思った。結果を知る事は違う可能性も含んでいるが、自分はもう何があっても後悔などしない。

桃との結婚を諦めた。しかし彼女との繋がりには切れず、遠くで見守って来られたのは互いの相手への愛情が信じられたからだろう。

決して桃の結婚を壊そうとはしなかった。悔しさで醜い気持ちを抱いた事も何度もあったが、彼女への変わらぬ想いが自分を止めた。

そこには何か見えない力が、今思うと感じられる。

だからこそ今、残り少ない時間の自分が確かめたいのだ。彼女の苦しみを自分から言い出す事に悩む気持ちも大きい。桃の身体に貯まった多くの涙が流れない事を願い、最後に確かめて、自分の好きだった人と全ての和解をして気持ちを修めたいのだ。そうしなければ私は自分が生きて、桃に捧げた愛を完結出来ないと考えた。

「太郎言いなさいよ」

私は長年の思いを桃に聞く決心をした。彼女が今此処にいる以上迷う必要は無いと思った。どんな結論が出ても、自分に後悔はない。

何本目かの煙草に火を付け、桃の目を見つめた。

「俺達の子供って、居ないのかと考えていた」

「光がいたわ」

「そうでなくて……」

言葉に出すと桃は少し驚いた様子だが、私がそう問うとも思っていたのか。私にはやはり予想していたと感じた。

「太郎、なにを言い出すの」

桃は否定するだろうが、私にも確信がある訳ではない。心のどこかで燻っている何かを、今解決したいのだ。

「なにを云いたいわけ……」

「桃の最初の子供。俺が父親でないかと思っていた」

彼女の沈黙は肯定か否定か判断は出来ない。目を閉じて、答えを考えているのだろうか。

私は静かに立ち上がり、網戸のある窓を閉めた。酒の為か寒さは感じない。部屋の中は十分換気され湿度も増した。私が窓際の椅子に座り煙草を吸い出すと桃も向かいに座わり、昔私より好きだった煙草に火を付けた。

「どうしてそう思うの」

「桃、孫の名前はなんて云う？」

「それは……」

彼女の孫の名前は太郎、私と同じ名前だった。偶然にしては出来すぎていると、名を知った時から思い始めた。

増して桃の子供の千春と云う名は妊娠する前「千の幸せが授かるように千春にするの」と私に物語のように話した事は、彼女はもう忘れていただろう。そこから疑いが大きくなったのも確かだった。

それに千春の生まれた時期は桃と別れて1年以内だ。可能性は十分に感じ、全く無いと否定するほうが私には不自然に思える。

私と別れを決意して結婚を決めた桃。結婚相手と私の交際が重なった時期もあった。

それは私の決断が弱く、暗黙で許していた事実だったのだ。

「太郎は太郎の孫ではないわ」

「本当に、そうかな」

「本当よ」

桃の手の震えで、私にはなんとなく嘘と感じられ希望が持てたと思った。今更言葉に出せる事でもない事も分かっている。

だが、真実でなくても言っただけの気持ちがある。

「そうか」

「そうよ……残念？……」

「ああ、とっても残念だね」

彼女は落ち着いた様子で煙草を燻らしている。雰囲気からすると本当に違うのかも知れないが、吸っている煙草の持ち方が何気なく変わった。それはあの頃、桃が知らない間に取ってしまう嘘について困った時の動作だった。多分、太郎は私の孫だろう。

「太郎と別れて、あの人と結婚して千春が生まれたわ。でも結婚は長く続かず1年で別れたの。別れた人は太郎も知った人。結婚式の写真も見たわよね。それから再婚もせず、一人で千春を育てたの。そして千春が結婚して今の生活。一言で言ってしまったけど、長かったわ。時々太郎に連絡はしていたけど、何も云わなかったし、云えなかったわ。云ったら太郎が変な気持ちを持つと思ったから。でも、千春は別れた旦那の子よ。名前はよくある偶然ね」

「そうか」

私はこれ以上どう話して良いのか分からなかった。私の疑いを否定されれば、これ以上何を言っても無駄である。どうして彼女は認めないのか。仮に嘘でも認めてくれても良いと思う私が普通ではないのか。今認めても何も問題は無いと思えるが、それは自分だけの考えなのだろうか。

桃が二本目の煙草を吸い出した。あの頃私より本数も多く、妊娠を考えて禁煙を頻繁に話した事を思いだした。

「孫の太郎は高松公園が好きで、良く私と散歩に行くの。松毬を拾うのが好きで、家に沢山集めているわ」

「桃、どうしてそんな話を……」

「私には、これしか言えないわ……」

高松公園の松毬は私と桃には特別な想い入れがあった。四季を通して良く散歩をした場所だった。桜の時期、落ち葉の季節、周りに薄く氷が張り白鳥の飛来した時も一緒に歩いた。最後に会った時も散歩をして、彼女が拾った松毬をその日の記念にと私に差し出した。今でも大切な想い出として持っている。乾燥して鱗片が何枚か取れてしまったが、捨てる事は到底出来なかった。鞆の奥深く古いその日の新聞に包まれ、何年も手にしてはいないが、中には変色して碎けかけた思い出の品がある。

「分かった、ありがとう」

桃の言葉で、全てを納得した。真実かどうかは言葉になかったが、彼女の答えを自分の思い通りに結論付けた。

桃が結婚後直ぐに離婚し、一人で育てたのも初耳で驚いたが、今となっては私に返す言葉は何もない。この千春の事で嫌な思い、悲しい思いをさせない事しか今の私には出来ないだろう。

「なんで、ありがとう、なの？」

「俺は桃に何もしてあげられなかったけど、桃に会えた事に感謝して、ありがとう、だな。今まで一緒には生活出来なかったけど、いつも心の中では桃を好きな気持ちを持ち続ける事が出来た。それで勇気を持てた時もあった。結婚はしなかったけど、遠くに離れた妻がいるような気持ちだったのだろうな。手の届かない妻だけだな。だから、俺の人生を今まで支えてくれた桃に感謝して、ありがとう。そう云わせて欲しいな」

「本当に太郎の趣味は私だったのね。でもこんな私で申し訳ないわ。もつと綺麗だったら良かったのにね」

「桃は今も最高に素敵だよ。今一緒に居られるのが本当に幸せでたまらないな。今夜一晩だけでも俺の一生が幸せだったとを感じる事が出来るよ。本当にありがとう」

「あら、今夜だけでいいの」

私は鞆の中から風呂敷に包まれた一冊のアルバムを出した。桃と二人で写した写真が全て薄い褐色に色褪せているが、好きな人と懐かしく思い出は甦る。勿論、古新聞に包まれた松毬も持って来た。彼女の驚く顔も見られる筈だ。ただの開いた状態の「松かさ」を、これ程長く持つている人間も私ぐらいだろう。

「ねえ、太郎。離れの露天風呂に入りたいわ。なんか素敵じゃない。一緒に入ろうよ」

装飾を排した数寄屋造りの中にある露天風呂は、雨の中で湯気を立て、今夜唯一の入浴を今待っている。日本庭園に面した風呂はガス灯で赤く照らされ、光さえも暖かく感じる。

手拭いさえも持たず、老婆は陶器の風呂に浸かった。ここは囲いの板も無く、湯気はゆっくり闇夜に消えて行く。風は止んでいる。

「太郎も早く入りなさいよ」

離れていた時間が、私に恥ずかしさをもたらしている。

「どうしたの、そんなにおいしいちゃんになっても、恥ずかしいのかな。早く来たら、暖かくて気持ちいいわよ」

彼女が雨で星の見えない夜空を見上げている間に、私は隣に静かに風呂に浸かった。湯は湯気から感じる温度よりも低く、柔らかく身体を温めた。溢れ流れた音が、雨音と自然に調和した。

おそらく特別に詠えた浴槽だろう。なんとも贅沢な気分だ。まるで高級な器に入る一寸法師だ。住吉の神に祈らなくても、老夫婦には子供が授かり、まさにおとぎ話のような一夜になった。

湯が音を立てて流れ、柔らかい硫黄の臭いが二人を包んだ。

「何年振りだろうね、こうして太郎と空を見るの」

「星が見えないのが、残念だな」

「昔、一緒に行った露天風呂で、お風呂の回りの雪が崩れてぬるくなつた事があつたわね」

「寒くて出られなくて、部屋に帰っても練炭炬燵だけで寒かったな」

「太郎は寒いと云いながら、ビールを飲んだわ」

「そうだったかな」

温泉は掛け流しで風情も最高。桃と一緒にいる事が本当に嬉しく感じ、雨の音さえ心に染みた。

「太郎、またあの温泉に行つて見たいわ」

「どこに」

「立て看板に落書きして来たじゃない。見に行こうよ」

「何年前の事だと思つているんだ、残つてないよ」

「残つて無くてもいいわ。こんな立派な所でなくていいの。太郎とまた温泉巡りをしたいの」

「山奥だからもしかしたら、落書き残っているかも知れないな」

「あるわけないわ。大昔よ」

お湯の温もりと彼女の存在が私を優しく包んでいた。湯に濡れた桃の肌はガス灯の光を吸収することなく、十分に跳ね返している。

自分の暖まった身体を夜風に晒すと、湯気が身体の中から漲る気力に見え、まだまだ大丈夫と力が湧いてきた。

今宵、長年の夢が叶った。明日から新たな希望を持っても、実現出来そうな夢も持てそうだ。隣には桃がいる。彼女の夢も何か叶えてあげたい。桃と一緒になら不可能は感じないだろう。そんな夢ではない感覚を、湯気の中感じている。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3540j/>

黄昏に煌めく

2010年10月21日20時18分発行